

# グローバル経済危機と社会科学\*

——近江商人に学ぶ——

酒 井 泰 弘

- I 近江商人に学ぶ——グローバル経済危機と社会科学
- II 資本主義か社会主義か——原理主義の陥穽
- III 世界恐慌は繰り返す——1930年代と2000年代
- IV 近江商人の開発力を考える——二つの交易三角形
- V 「アニマル・スピリッツ」を論じる——新しい社会科学への道

## I 近江商人に学ぶ——グローバル経済危機と社会科学

### 「温故知新」の金言を考える

我々は現在、グローバル経済危機の真只中にいる。アメリカ発の金融同時不況は、アメリカ、日本そして世界全体の経済状態に対して甚大な悪影響を及ぼしている。会社・銀行・百貨店の規模縮小と倒産連鎖、労働者の大量失業と非正規化、都市のスラム化と犯罪率の増大、生活不安と自殺者の増大などなど——世界はまさに1929年の「世界大不況」の再来に近い状態である。

こういうグローバル経済危機の中で、わが経済学はどう対処しようとしているのだろうか。経済学はかつて「社会科学の女王」と尊称され、理系に近い精密性と実証性を自他ともに誇っていたようだ。だが、今やそれも「昔日の残影」にも似た状態にまで退化しつつあると心配している。経済の危機は経済学の危機を意味するのであろうか。それとも、いわゆる「逆転の発想」で、経済の危機はむしろ経済学の再生・復活への「起爆剤」となるのであろうか。たとえ「古い経済学」は見込み薄だとしても、何か「新しい経済学」の誕生が期待できないであろうか。

彦根・近江八幡などの北近江・東近江地域は、古くから「近江商人の発祥地」

である。近江商人は、今をときめく「強欲資本家」とは異なり、人々との信頼関係や長期的視野に立ち、勤勉でバランス感覚もよく、「ほどほどの生活」を心がけていた。現在の経済危機の中にあって、強欲資本主義とは対極の「近江商人道」から、我々が学ぶことはないのだろうか。「温故知新」という言葉が、現代ほど妥当する時は他にないのではないだろうか。

以上のような一連の問題に少しでも答えようとするのが、本稿執筆の動機であり、目的でもある。わが滋賀大学はグローバル経済危機の進行にもかかわらず、日本最初のリスク経済研究拠点を作り上げることに成功し、少なからざる新機軸と新展開を行ってきた。その間に旗手の役割を演じて来られた成瀬龍夫先生が、このたび学長として定年退職されることは、真に感慨深いものがあるかと思うものである。

#### アメリカ在住の友人からの言葉

私はかつてピッツバーグ大学に勤めていたことがある。そのときに大変お世話になった先輩の先生は今や同大学名誉教授なのだが、去る2009年1月、次のような切実な内容の年賀状を私にわざわざ送ってくださった。

「昔の同僚たちは、特に変わったことはございません。だが、私たちは株の暴落のために、大学を通じて貯めている老後の生活基金が激減しています。定年制のないアメリカですので、退職年度を引き伸ばすのが得策かもしれませんね。でも、私のように既に退職した者にとっては、財布の紐を一段と締めて、景気の好転を待つ以外に、打つ手がありません。

アメリカのサブプライムに端を発した世界同時不況は、退職後の生活を脅かすだけではありません。それはまた経済学と経済学者の実用価値を問うているのですが、多数のノーベル賞受賞者を含むアメリカ経済学界の指導者たちの声は余りきかれませんよ」

アメリカ発の金融同時不況は、大学教授やサラリーマン・主婦など、一般庶

民の生活設計を大きく狂わせているのだ。日本でもしばらく前までは、「貯蓄より投資へ」というスローガンの下で、異例なゼロ金利政策が意図的に採用されてきたために、退職金を含めた多額の資金が色々な投資信託へと流れたものだった。日本の大学の定年退職者の多くも、上記のアメリカの友人と同様に、その退職金の半分ないし三分の一程度を投資信託資金として運用したのではないだろうか、と想像している。なお私自身は、「リスク研究者」としては珍しく(?)、そして「近江商人研究者」としては当然のことながら(!)、虎の子の退職金を株式購入に活用することは全く無かった。「不幸中の幸い」とでも言うべきだろうか。

もっと深刻な問題は、上記の手紙の後段の部分に関係する。友人が嘆いておられるように、経済学や経済学者の実用価値が問われているのに、著名な学者たちの大多数はひたすら沈黙を守り、ただ「逃げの一手」を打っているだけなのだ。元気な学者はスティグリッツ (Joseph Stiglitz) やクルーグマン (Paul Krugman) のようなリベラル非主流派の数人を数えるだけで、ルーカス (Robert Lucas)、コ克蘭 (John Cochrane)、ハール (Robert Hall) のような保守主流派の大部分、とくにフリードマン以来の後期シカゴ学派の闘士は今では不思議なほど静かに控えているということである。

上記の先輩教授は1ヶ月ほど前の2009年10月、個人的事情のために突然に来日されることになり、私と久しぶりの再会を果たされた。そのときに、私は現代経済学者の実用価値の問題を直接尋ねたみたところ、友人は「状況は正月以来変わっていないね」と述べられたあとで、著名な法経済学者ポスナーの最新の話題作『資本主義の失敗』(原題は *A Failure of Capitalism*, 2009年刊行で日本語訳なし)を一冊提供してくださった。

ポスナーの新著を一読したところ、気にかかる所が随所に存在する。まず、著作のタイトル自体が強烈である。この主流派のポスナーでさえも、資本主義の「失敗」を認めているのだ。もちろん、「強い形」の定冠詞“the”の失敗ではなく、「弱い形」の不定冠詞“a”の失敗だとしても、今回における資本主義の(一つの)失敗を正直に受け入れている。新著の第8章は「経済学界は大転

換期を迎えるも睡眠状態」(The Economics Profession Asleep at the Switch)と題されており、次のような文章で始まるのだ。

「金融危機の予測失敗について最大の謎の一つは、かくも大勢の経済研究者たちがかくも予測できなかったのは何故か、という点である」

この点は、さらに次のようにも展開されている。

「今回の不況にさいして、経済学者が予測できず断固とした対応をとれなかった根本的事情として、経済学の中で《不況の研究》自体が満足できる状態になかった、という事実がある。不況の研究が無視された分野だというよりはむしろ、今日の経済学界全体が(良しきにつけ悪しきにつけ)経済思想の歴史を無視してきたわけである」

これを読むと、金融危機や経済不況の中にあって、経済学者の罪は相当に重くと言わなければならない。その根本原因の一つとして、アメリカの学界において「経済思想の歴史」が近年不当に軽視ないし無視されてきた、という事情がある。事実、私が40年前にアメリカ留学をしたときには、ケインズの名著『一般理論』(*The General Theory of Employment, Interest, and Money*)やシュンペーターの大著『経済分析の歴史』(*The History of Economic Analysis*)が、大学院や学部の講義の中で立ち入って検討するということは、ほとんど一切なかった。当時においても、そして(上記のアメリカの友人の話によると)今日においても、アメリカの学界における経済学史や経済思想史の専門家はごく少数であり、不当に疎んじられる傾向がある。

これに対して、わが日本経済学界では伝統的に、学史や思想史の研究者の層が相当に厚いはずである。だが、残念なことに、彼らの存在感や影響力はやや限られているようだ。思うに、グローバル経済危機の中で、我々は今一度、過去の偉人たちや商人道・家訓に立ち返り、経済学を含めて社会科学全般の再生

と構築を図る必要があるだろう。とくに、人間の信義・信用に配慮し、勤勉とバランス感覚を重んじるというような「一見古い近江商人」の商人道から、現代の我々が学ぶべき「新しい教訓」は幾多あると信じている。本稿が、そのための方針や方向性を示す一助となれば幸甚であろう。

## Ⅱ 資本主義か社会主義か——原理主義の陥穽

### 今年の漢字とリスク

「今年の漢字」というのがある。毎年12月、清水寺の奥の院舞台にて、森清範貫主が一年の世相を象徴する漢字一字を巨大な和紙に揮毫する。1995年から始まった今年の漢字を年次順に並べてみると、次のようである。ただし、丸かつこの中の数字は西暦年の下二桁を表わす。

震 (95), 食 (96), 倒 (97), 毒 (98), 末 (99), 金 (00), 戦 (01), 帰 (02), 虎 (03), 災 (04), 愛 (05), 命 (06), 偽 (07), 変 (08), 新 (09)

上記の漢字の系列を眺めると、そこに一つの共通項があるのが分かる。それが他ならぬ「リスク」なのだ。1995年の「震」は阪神・淡路大震災、翌年の「食」はO157による集団食中毒、次の「倒」は企業・銀行の倒産、「毒」は和歌山毒入りカレー事件を示す言葉である。そして、1999年には東海村原発事故などの世紀「末」の事件が発生したが、2000年のシドニー・オリンピックでは「Qちゃん」こと高橋尚子選手が日本女子マラソン初の「金」メダルを獲得した。リスクは概してマイナス面が付随することが多いが、時には「金メダルの夢の実現」というプラス面が結果することもあるのだ。

2001年は21世紀の最初の年である。その年を象徴する一字が「戦」であり、アメリカでの同時多発テロの発生とともに、いわゆる対テロ戦争が勃発した。戦争リスクは、人類が自然と文明に対して行う最大の破壊行為である。翌02年には北朝鮮に拉致されていた日本人が永年の「帰」国の夢を果たし、03年には猛「虎」の阪神タイガースが19年ぶりにリーグ優勝を実現した。「筋書きのな

いドラマ」と称される野球は、「ハイリスク・ハイリターン」のスポーツの象徴だ。

2004年は新潟県中越地震が発生するなど「災」害の多い年であったが、翌05年には愛知県で地球を「愛」する博覧会、つまり「愛・地球博」が開催された。博覧会を楽しむ人々は、その背後で恐ろしい地球破壊リスクが累積していることを忘れるべきではない。06年には悠仁親王という名の「命」の誕生が話題になった。人間の命は、生の瞬間から死の瞬間に至るまで、色々なリスクに直面・対処していかなければならない。

2007年には年金の不正記録問題の発生など、正義とは程遠い「偽」の問題が輩出した。08年には「変」革（チェンジ）を求めた黒人オバマ氏がアメリカ大統領選挙に勝利し、09年には日本で戦後最初の政権交代が実現し、友愛精神の鳩山由紀夫首相が誕生した。その年の漢字は、新政権の「新」である。

このように、過去15年間、今年の漢字を順次眺めてみると、色々なリスクに満ち満ちた事件・事故のオンパレードである。本稿ではとくに焦点を絞る形で、「グローバル経済危機と社会科学」という観点から、現代におけるリスク問題の様相と、将来への教訓と方向性について私見を開陳したいと思う。これはある意味で、40年という私の長い研究教育経験の総決算を意味するかもしれない。

## 1917年10月と1991年12月

21世紀は「社会主義の世紀」である。人々は「資本主義か、それとも社会主義か」というシステム選択をめぐる激論を交わし、運動と戦争、さらには革命と反革命を起こしてきた。二つの原理主義の間の戦いにおいては、和解や「中間の道」がなく、いわば不毛の消耗戦しか残されていないのだ<sup>1)</sup>。

ところで、一つの原理主義の勝利は、もう一つの原理主義の敗北を単純に意

---

1) 私ははるか昔の学生時代から一貫して、「資本主義か社会主義か」という体制選択の問題に興味を持ち続けてきた。最近の小論としては例えば、酒井泰弘(2006)、第7章を参照されたい。

味するのであろうか。そうではない、と私は確信するのだ。実際、仮にもし更に高みの言わば「高僧の見地」から見れば、二つの原理主義の「武将」は戦場で互いに傷つき、のた打ち回っているに過ぎなかったのではないだろうか。我々が21世紀から学んだものは、「原理主義の陥穽」からの脱却と、「新しい社会科学」の樹立の必要性である。この点は、本稿において徐々に明らかにしていこうと思う。

顧みれば、1917年10月、ユーラシア大陸の一部でソビエト政権が誕生し、世界史上最初の社会主義革命が実現した。それ以来、社会主義の衝撃が全世界規模で伝播していき、社会主義と資本主義との間の経済競争はますます激化していった。例えば、当時のソ連の国定の『経済学教科書（改訂第3版）』（1959）は、次のような「結論」でもって締め括られている。

「資本主義は歴史的に見て破滅の運命にあり共産主義の勝利は避けられない」

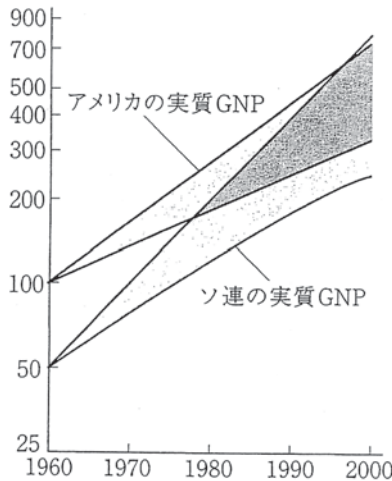
そして、こういう危機意識は資本主義の超大国アメリカにおいても共有されていた。有名なサミュエルソンの教科書『経済学（第7版）』（1967年）には、図1が描かれるとともに、次のような説明文が付けられていた。

「アメリカのGNPはソ連のGNPよりほぼ2倍大きい。だが、20年後の1980年ごろにはソ連がアメリカに激しく肉迫し、40年後の2000年にはアメリカを追い抜く可能性がある」

20世紀を代表する経済学者サミュエルソンにおいてすら、社会主義に対する資本主義の優位に疑問を感じていたわけだ。ましてや、一般大衆のレベルでは、人工衛星スプートニクを飛ばし、「地球は青かった」との名言を吐いた宇宙飛行士ガガーリンを生んだソ連は、まことに輝ける「希望と未来の国」であるかのような印象を与えていた。

ところが、「奢れる平家久しからず」である。世界史を驚嘆させる事件が、

図1 社会主義と資本主義との間の経済競争



出所：サミュエルソン『経済学（第7版）』（1967年）

世紀末に発生したのだ。事実、1991年12月に、ソ連は国家として消滅し、新生ロシアと15の共和国に分解してしまったのだ。「まさか、社会主義ソ連が、この世からこんなに簡単に消滅するなんて！」というのが、普通の人々がそのときに受けた心の衝撃であろう。たしかに、20世紀の歴史を単純に眺めると、さながら資本主義が社会主義との闘争に勝ち、「市場原理主義」が「政府原理主義」に勝利したかのようである。

しかし、これで我々が「歴史の終焉」(フクヤマ)を迎えた、と断定するのは果たして妥当だろうか。私見によると、「盛者必衰の理を表わす」という金言は、何も社会主義や政府原理主義だけに妥当するわけではない。同じことはライバル関係にあった資本主義や市場原理主義にも当てはまるはずである。

「歴史は繰り返す」のである。かの源平の戦いにおいて、平氏が源氏にまず勝ったが、後に源氏が平氏を滅ぼした。だが、天下についての源氏政権は永続せず、やがては源平ともに歴史から消滅してしまった。我々は社会学者として、歴史からの教訓を謙虚に学ばなければならない。



### Ⅲ 世界恐慌は繰り返す——1930年代と2000年代

#### 1930年代の世界恐慌

本稿の主題の一つは、「失敗は繰り返す」という格言の真偽の検証である。我々は現在、グローバル経済の危機を迎えている。グリーンスパン前連邦準備銀行（FRB）総裁は、近著（2007）の中で次のように書いている。

「我々は百年か五十年に一度の世界大不況に直面している」

前回の世界大不況は、かの1929年に始まった「世界大恐慌」(Great Depression)である。それ以来80年の星霜が流れて、今回の世界大不況である。まさに、過ちはリピートするということだろうか。グリーンスパンはアメリカの中央銀行のトップであるから、大不況を起こした責任者の一人であるはずだが、このようにまるで他人事のような言葉を発するのは、まことに不可思議千万と言わねばなるまい。このように、トップが責任回避を図ろうとすること自体が、世界恐慌の深刻さを物語るものであろう。これもある意味で「歴史の必然」なのだろうか。

これに対して、私と同世代でノーベル賞受賞者であるクルーグマン教授（2008）も、次のように明快に述べている。

「これは第二次世界恐慌（Second Great Depression）の始まりのようだ」

人間は愚かしい存在であり、歴史を学ぶことなく、間違いを繰り返しがちである。従って、恐慌は何度も繰り返され、世界規模の戦争も再発するのであろうか。それに回答を見つけるためにも、われわれは1930年代の世界恐慌の進行を再吟味しなければならない。

1929年と言えば、日本の暦で昭和4年、私の義父が地元的高等教育機関を卒業した年である。いわゆる「天下の彦根高商」を意気揚々と出た義父を待ち構

えていたものは、皮肉なことに、その出鼻を挫く「天下の世界不況」だったのだ。実際のところ、同年の10月24日の木曜日、アメリカの株価は歴史的な大暴落を記録し、これが瞬く間に日本を含めた世界の国々に波及した。これは別名「暗黒の木曜日」(Black Thursday)と呼ばれている<sup>2)</sup>。

悪い出来事は、波状的に何度も何度も繰り返す。五日後の10月29日は、暗黒より更にひどい「悲劇の火曜日」(Tragedy Tuesday)となり、株価の再度の大暴落という悲劇が到来した。爾来、1930年代において、株価暴落・工場閉鎖・大量失業というような、経済不況の大嵐は国境を超えて世界各国に波及し、ここに歴史に悪名高い世界恐慌の到来、ならびにその後の世界大戦の開始という「人間の大悲劇」の幕開けとなった。

1930年代の世界恐慌の推移を略述すれば、次のようになる。まず、1931年9月11日に、イングランド銀行が金本位制を停止した。同銀行は、七つの海を支配した大英帝国の金融の中心であったから、基軸通貨ポンドから純金への兌換の停止措置は、事実上、金本位制の崩壊を意味したわけである。1936年には、異才ケインズが論争の書物『雇用、利子および貨幣の一般理論』を出版したことによって、いわゆる政府の財政金融政策の動向を説く「不況の経済学」が、20世紀の経済学界を次第に席卷するようになってきた。

ところが、いわゆる積極的な「ケインズ政策」がその画期性にかかわらず、経済不況の底割れをなんとか凌ぐ効果しか持たなかったのは、歴史上の皮肉であろう。第1次世界大戦に敗れたドイツの経済荒廃や膨大な賠償金支払いはあまりにも膨大であったために、国家財政の破綻が生じるとともに、「一発逆転」にかけようとする絶望的な雰囲気国民の間に醸成された。その結果として、ドイツ・ナチズムの台頭と隣国ポーランドへの侵攻が発生し、遂には1939年9月3日、イギリスとフランスの両国がドイツへの宣戦布告を發した。ここに世界大戦の悪夢が再現されることになった。歴史はやはり繰り返すわけだ。

---

2) 1929年の「大崩壊」(Great Crash)と30年代の「大恐慌」(Great Depression)の分析については、ガルブレイス(1990)が透徹した分析を行っている。本稿でも、大いに参考にさせていただいた。

詳しく述べると、1939年から1945年にかけて、アメリカ・日本・中国を巻き込んだ形で、硝煙の戦地が世界中を燎原の火のように拡大していった。そして、第二次世界大戦は、1945年8月15日における日本の降伏をもって遂に終結した。私自身は1940年、大阪市内の生まれであるから、B29爆撃機による20回以上に及ぶ焼夷弾投下の中で、その凄惨な幼年時代を過ごした。「焼夷弾の絨毯投下、即ち家族全員の緊急避難、即ち空腹絶望の地獄状態」というのが、当時の私の偽らざる心境であった。

問題の核心は、人々がこういう悲劇をいかに終結させ、通常的生活をどのように復活させるかである。世界恐慌が世界大戦を呼び込んだ以上、まず前者を再発させないことが最重要課題であるはずだった。ところが、人間は過ちを繰り返す悲しい存在である。かの大不況から80年後には、グローバル経済危機の嵐が再び世界の国々を襲うことになる。

### 2007年以降の世界金融危機

現代の歴史を語るとき、「2001年9月11日」は永久に忘れない日付となるだろう。2001年という年は、確かに新しいミレニアムが始まる年であるが、それよりも恐らく「アメリカ極支配の終焉」の開始年として記憶されるのではなかろうか。それほど、かの「9/11」の歴史的重みは大きいのだ<sup>3)</sup>。

実に、新世紀の最初の年の9月11日、超大国アメリカの国内にて「同時多発テロ」が発生した。ニューヨークのマンハッタン島の南端に聳え立つ「ツイン・タワー」(TWIN TOWER)が、テロリストにハイジャックされた大型旅客機2機による自爆突入を受けて、脆くも瓦解してしまった。私はそのとき朝のテレビ番組を見ていたのだが、画面の上部に突然、次のようなテロップが走るのを見て驚愕したのを覚えている。

3) 2007年以降の世界金融危機と大不況に関しては、今や多数の著作が興味深い論点を提供している。本稿の執筆にさいしては、グリーンズパン(2009)、神谷秀樹(2008)、金子勝・ヒューイット(2008)、クルーグマン(2008)、中谷巖(2008)、丹羽宇一郎(2009)、ライシュ(2008)、榎原英資(2009)、ソロス(2008)などが参考になった。

「臨時ニュース。ニューヨークのツイン・タワーの上部から噴煙発生」

私はわが眼を疑って再びテロップを読み返した。「間違いない！これは大変だ！」と直感して、テレビのチャンネルを国内番組からCNN放送のほうに切り替えた。確かに、ツイン・タワーの一つの上部から噴煙がもくもくと出ていた。アメリカのアナウンサーすらも、事態の正確な把握が十分にできてないらしく、「大変です！大変です！信じられない出来事が起こっています！ツイン・タワーの一つが燃えています！」とヒステリックに絶叫する有様だった。ややあって、(もう一台の)飛行機が接近してきて急旋回し、もう一つのツイン・タワー目がけて突入したのだ。それから、新たな噴煙と新たな絶叫——この段階にきて漸く、ツイン・タワーに何が発生したかを知ることが出来た。

それから10年を経たないうちに、ソ連崩壊後の唯一の超大国アメリカの屋台骨を揺るがす、経済上の一大事件が輩出した。事実、2007年8月より、アメリカの住宅バブルが次々と崩壊した。いわゆる「サブプライム・ローン問題」の顕在化である。「サブプライム・ローン」というのは「言葉のあや」にすぎず、通常の審査基準では返済能力のない(従ってプライム以下の)人々に対する、銀行・信用機関からの積極的な(無謀ともいえる)住宅資金貸付のことを言う。もちろん、「もし仮に」アメリカ経済が順調に進行し、土地・家屋などの不動産価格が不断に上昇するかぎりにおいては、こうした住宅貸付の回収作業が無事進み、万事がすべて上手く進行するはずである。だが、「もし仮に」の前提条件が満たされなかった場合には、万事がすべて悪い方向に進行するだろう。これは自明の理であるが、人間が欲にはまると、際限がないらしい。ある日、ある所で、一旦ローンが焦げ付くや否や、負債・破綻の連鎖が「燎原の火」の勢いでアメリカ国内に波及しはじめた。

そして遂に、2008年9月15日、大手証券会社の一角であるリーマンブラザーズが倒産した。「あの不死身のリーマンブラザーズが倒産だって！君、冗談もい加減にしたまえ！」というのが、倒産の一報を聞いた証券マンの偽らざる反応であったのだ。

2008年9月29日には、ニューヨークのダウ平均株価が史上最大777ドル減の大暴落を記録した。以後、ヘッジファンドや投資ビークルなど、いわゆる「影の銀行システム」(shadow banking system)が雪崩を打って瓦解していった。巷間では、ウォール街の自爆とか、強欲資本主義の成れの果てとか、火事場経済の自浄過程とか、いろいろ刺激的な表現が用いられたのも、この頃のことである。しかも、単なる金融システムの機能不全だけではなく、肝心要の実体経済システム自体が悪化し始めたのである。

「GMに良いことは、アメリカに良いことだ」(What is good for GM is good for America)

かつて、世界一の自動車王のGM会長は上のように豪語した。このGM(ゼネラル・モーターズ)がフォードやクライスラーとともに、アメリカ自慢の「ビッグ・スリー」を形成したのだが、それぞれ「ピククリ・スリー」と形容される位に営業が悪化し、破産ないし公費投入を余儀なくされる始末だ。

既に述べたように、グリーンズパン前FRB議長は「100年に一度の世界大不況」と評論している。グリーンズパンは今回の世界大不況の責任者のはずだが、まるで他人事のような言葉で涼しい顔をしているようだ。また、私と同世代の旗手でノーベル経済学賞受賞のクルーグマンは「第二次世界恐慌」(a Second Great Depression)と形容している。

かの1930年代の大恐慌以来、我々は十分学習したはずだった。この間の経済学の発達は目覚ましいものがあり、自他ともに「社会科学の女王」の地位を築いた。だが、グリーンズパンやクルーグマンの言葉を聞いていると、我々の学習は決して十分だったわけではない。かつて、日本が生んだ応用物理学者の第一人者・寺田寅彦氏は、次のことばを我々後代の者に残している。

「天災は忘れた頃にやって来る」

大恐慌はもちろん天災ではなく、人間が創造した恐るべき大人災である。私はここで寺田先生の名句をもじって、次のような文句を創りたいと思う。

「恐慌は忘れた頃にやって来る」

恐慌や大不況は繰り返すのである。それも強固に頑固に繰り返しつづけるのだ。1930年台の恐慌の発生は——直接的にせよ間接的にせよ——第2次世界大戦の勃発と惨禍をもたらしたと言われている。問題は、今回の恐慌を契機として、世界規模の戦争が再び繰り返されるだろうかどうかである。

このような「経済過熱→恐慌→戦争→戦後復興→過熱→恐慌→…」の連鎖は、それなりの因果関係を持っているだろう。だが、私は決して一面的な運命論者ではなく、歴史とは必然と偶然の間で揺れ動く「揺らぎのプロセス」であると信じている。

なるほど、欧米社会によく見られる過度の「合理主義的」な思考と行動様式においては、上記の「悪魔の連鎖」はある程度の必然性を有するかもしれない。だが、穏やかな伝統と倫理に育まれた日本社会においては、目先の金銭計算よりも長期の信頼関係が重視される。

また、「負けるが勝ち、損して得とれ」という表現が表わすように、短期的なマイナスがむしろ長期的なプラスを生む可能性すらあるのだ。

要するに、上記の「悪魔の連鎖」を切るためには、われわれは21世紀に相応しい「新しい価値観と生活様式」を模索する必要がある。だが、有限な人間の有限な頭脳から「突飛もない不可思議な価値観」を創出することは、土台不可能だろう。そこで、「温故知新」よろしく、いまや忘れがちな伝統的な価値観を新しい現代に生かすのが、賢明な方策だと思う。思うに、現代に生かすべき伝統的な価値観と生活様式の一つが、近江商人の「三方よし」の生き方である。この点については、後に詳しく論じることにした。

#### IV 近江商人の開発力を考える——二つの交易三角形

##### 奴隷貿易と強欲商業資本主義——イギリスの交易三角形

リスクと保険文化とは密接に関係している。今回の経済危機の様相と過熱ぶりは、その背後にあるリスク観や文化伝統のありかたと無縁ではない。ここではやや話題を転じて、保険文化の視点からイギリスと日本という二つの島国を比較することによって、近江商人の開発力と「三方よし」の精神を深く吟味したいと思う<sup>4)</sup>。

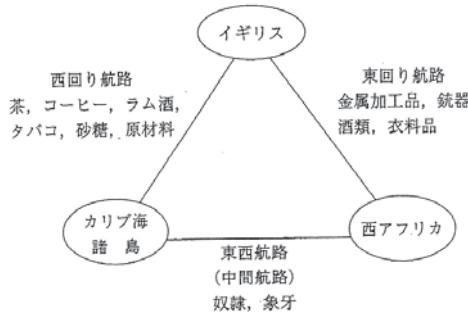
去る2006年11月26日、イギリスの一流新聞『オブザーバー』誌上に、一般読者の目を驚かせる特別寄稿記事が掲載された。その記事とは、「奴隷貿易——イギリスの《悲しい歴史》の長い奇跡」(Slavery: The Long Road to Our Historic ‘Sorrow’) という題の、歴史家ハント氏 (Tristan Hunt) の署名入り記事のことである。実は、はるか1517年に開始された悪名高き奴隷貿易が、300年後の1807年に漸く廃止された。だから、2006年というのは、「奴隷貿易廃止300年記念」の年に当たるわけなのだ。

イギリスが大英帝国として七つの海を支配していた18世紀においては、奴隷貿易が隆盛を極めていた。そして、かかる奴隷貿易こそが、世界の商業史上有名な「三角貿易」(triangular trade) の一環を形成していたのだ。

当時のイギリスの「交易三角形」を端的に図示すれば、図2のごとくになる。問題の三角形の「三点」とは、本国のイギリス、西アフリカおよびカリブ海諸島を意味する。イギリスの港湾(ブリストル、リヴァプールなど)から東回りに、大西洋を南下して西アフリカ海岸(俗にいう奴隷海岸、象牙海岸など)に達するのが「東回り航路」であって、金属加工品(食器、装飾品など)、銃器、酒類、衣料品などが運搬された。次に、西アフリカ沿岸から太平洋の真只中を横切ってカリブ諸島(ジャマイカ、バルバドスなど)に到達するのが「東西航

4) 田村祐一郎・高尾厚・岡田大志編(2008)の中第1章において、私は保険文化の視点から「二つの交易三角形——イギリスと日本」を詳しく論じたことがある。以下の論述は、この小論をよりコンパクトにし、さらに現代風の味付けを加えたものである。

図2 18世紀イギリスの交易三角形——奴隷貿易の役割



路」または「中間航路」(middle passage)であって、奴隷や象牙などが運送された。最後に、カリブ海諸島の港湾から西回りに太平洋を北上して、本国イギリスに帰還するのが「西回り航路」であって、ここでは茶、コーヒー、ラム酒、タバコ、砂糖、原材料などが運ばれた。

これら三つの航路の中で最も枢要なのは、もちろん東西航路である。その理由はもちろん、「宝の山」ともいふべき奴隷商品が、最大の交易品目を構成していたからである。奴隷貿易は大英帝国に膨大な富と利益をもたらした反面、行き過ぎた強欲と、猛烈なモラルハザードとを同時に生み出した。人はここに「強欲商業資本主義の権化」を見出すこともできよう。

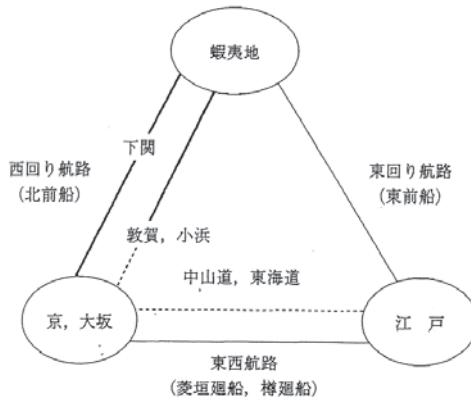
実際、大西洋を横断する東西航路は、天候に左右される「ギャンブル航路」としても知られていた。必要航海日数が数週間から数ヶ月まで一定しないばかりか、過重に積載されがちの奴隷の多くが病気にかかり、海上投棄されるということも珍しくなかった。通常の商品の品質管理ならともかく、酷いことに、「人間商品の品質管理」がリスク管理の最大問題の一つとみなされていたわけである。その極め付きとして、奴隷商品の運送までもが海上保険の対象品目となり、悪名高い保険裁判——ゾング号事件 (the Zong case) ——が発生するのだが、本稿ではこれ以上深入りしないことにする。



### 蝦夷地貿易と「三方よし」の精神——近江商人の交易三角形

18世紀イギリスの交易三角形は上に論じたとおりだが、わが近世日本には「もう一つの交易三角形」が存在していた。それは図3に示すように、近江商人と蝦夷地貿易に関係する三角形である<sup>5)</sup>。

図3 近江商人の交易三角形——蝦夷地貿易の役割



近江商人の交易三角形を構成する三点とは、「蝦夷地」（函館・江差・津軽など）、「上方」（京・大坂など）と「江戸」（および周辺の関八州）の三地域のことである。なるほど、かかる三角形は、イギリスの交易三角形と比較すると、距離的にも規模的にも小さいことは否めない。だが、鎖国日本の歴史と閉鎖的な幕藩体制の事情を斟酌するならば、近江商人の開発力とフロンティア精神とはなかなかのものであった。正直なところ、近江商人の活躍ぶりは、「北の地中海」とも称されるバルト海を中心に活躍した「バルト商人」の冒険魂を上回っているとも言えよう。だが、バルト海商人のことは別に論じるとして、本稿では近世イギリス商人と近江商人との比較分析に論点を絞りたいと思う。

当時の「蝦夷地」とは、当時の「和人」にとって辺境・異郷の土地を表わす

5) 近江商人の開発力と「三方よし」の精神については、今は亡き碩学・小倉栄一郎教授の著作(1980, 89, 91)が優れた学術文献である。さらに、本稿においては、藤本義一(2006)も大変参考になった。

言葉である点に注意して欲しい。それは、現在の北海道全域のみならず、青森・秋田などの津軽海峡周辺など、実に広大な地域をカバーしていた。これに対して、京（現在の京都）は、794年の平安京遷都以来、千年以上の長きにわたって日本の都であった。都大路から東山を越えれば日本最大の湖・琵琶湖が横たわっており、その北へ山越えすれば、日本海の大海原が広がっている。当時は、日本海のほうが太平洋よりも重要な海域であり、洗練された京文化が日本海沿岸の各地域へと伝播された。京に近い大坂（現在の大阪）は、当時の日本の経済の中心地であり、ほぼ全ての財貨がいったん大坂に集積されたあとで、近くの畿内一円から、江戸・関八州などの遠方消費地へと分散輸送された。

図3において、実線が海上交通、点線が陸上・湖上交通を表わす。蝦夷地、上方および江戸が物資輸送の三大拠点である。第一に、蝦夷地と上方を結ぶ「西回り航路」であり、そのルートを用いて昆布・鱈・鮭など、北方の海産物が上方の人々にもたらされた。ただし、歴史的にみると、このルートには、二通りのものがある。「古いルート」は、函館・江差・津軽など、北方の港湾から日本海沿いに南下し、越前の敦賀や若狭の小浜などの良港に到達するコースである。そこで積荷を下ろして、街道沿いに山越えて琵琶湖に到達し、湖上交通を利用する形で京・大坂の終着点に達することができる。昔の近江商人たちはこの古いルートを活用したが、そこには「海路→陸路→水路」というような輸送手段の変更に伴う、労力の無駄と物資の目減りが避けられなかった。

そこで、同じ西回りルートと言っても、陸路によらず海路のみによって、蝦夷地・日本海沿岸の物資を上方に運ぶ「新しいルート」が開発された。かかるルートは、日本海をはるかに南下して、長州の下関経由で瀬戸内海に入り、大坂天満の倉庫に向かうコースであった。これは一見迂回コースに映るかもしれないが、「北前船」（きたまえぶえ）オンリーの単純明快コースであって、輸送物資の目減りや損傷が大幅に減少した。

それでも、日本海を通る北前船交易は、いわゆる「ハイリスク・ハイリターン」の経済活動であった。一方において、もし航海に成功すれば、「北の幸」は「利益千両」と言われるほどの膨大な利益を近江商人にもらした。他方にお

いて、日本海航路は特に冬場にはリスクの大きいルートであり、難破・漂流・海賊など、各種のリスクが存在した。このことから、近江商人たちは仲間をつのって、「海上積金」という制度を設けた。これは前期的性格なものであるが、今日の海上保険制度にもつながる、画期的な「助け合い制度」である。

北前船に従事した近江商人たちはおおむね、蝦夷地の人々との間で、長期的信頼・信義に基づく共存共栄関係——いわゆる「三方よし」の関係——を取り結んでいた。この点は、奴隷貿易に従事した近世イギリス商人に特有な、非人間的強欲主義とは全く異なっている。

蝦夷地から本州の消費地へと南下するルートは、日本海経由の西回り航路だけでなく、太平洋を直接南下して「江戸直送」に関わる「東回り航路」も開発され、繁盛していった。これには「東前船」（ひがしまえぶね）といわれる船舶が活躍したが、このルートも「ハイリスク・ハイリターン」であったに相違ない。なにしろ、津軽海峡・三陸沖・常陸沖は、風雪が激しく吹き荒れ、大波が逆立つ難所である。それでも、商人たちは仲間内で海上積立金を通じて一種のリスク・プーリングを図りながら、北の幸を大消費地の江戸に運搬することに成功した。そのときの商業道徳は概ね「三方よし」の精神であって、長期的・継続的取引関係の維持が至上命題であった。

江戸時代においては、江戸、京および大坂は、他に比肩するものがないほど巨大な「三都」であった。江戸以前の中世では、上方と江戸を結ぶルートは専ら、中山道や東海道などの通る陸上ルートであり、そこで近江商人たちが大活躍したのは余りにも有名である。ところが、陸上ルートでは、風雪による商品劣化や窃盗などのリスクが多発したので、後には「菱垣廻船」（ひがきかいせん）や「樽廻船」（たるかいせん）というような帆船を用いての海上輸送も同時に利用されるようになった。いわゆる回船問屋の活躍を通じて、塗り物、絹布・雛人形、小間物、葉・砂糖、畳表、紙・ろうそくなどが、大消費地・江戸の人々にもたらされた。かかる「東西航路」においても、「振分散」（ふりぶんさん）と言われるリスク・シェアリングの制度が発達し、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの商業政策がおおむね実行された。

上に見たように、同じ交易三角形の形態をとっているとはいえ、近世イギリスの交易三角形と近江商人の交易三角形とは、商業道徳やモラルの点で非常に異なるところがある。強欲で短期的な金銭的利益だけを求め、奴隷取引というような非人道的なものにまで手をつけるのか、それとも長期的視点に立ち、信頼・信義という人間関係を重視するのか——この両者の間のギャップはまことに深遠である。かかる溝の大きさを理解することは、20世紀から21世紀に至る現代資本主義の課題と方向性を考察するうえで、第一級の重要性を持つだろうと信じる。

## V 「アニマル・スピリッツ」を論じる——新しい社会科学への道

### アカロフ＝シラーの新著を入手して

本稿の執筆に少し疲れを覚えた在る日、私は馴染みの老舗書店にぶらりと立ち寄ってみた。そのとき、私の眼中に真っ先に飛び込んできた一冊の英語の新著がある。そのタイトルは実に単刀直入に『アニマル・スピリッツ』(*Animal Spirits*)、サブタイトルはもっと説明的に「人間心理が経済をどう動かし、そのことがグローバル資本主義になぜ重要なのか」(*How Human Psychology Drives the Economy, and Why It Matters for Global Capitalism*)と書かれている。

上記の新著は二人の共同作業の結晶である。その一人は私と同世代でノーベル経済学賞受賞者のジョージ・アカロフ、そしてもう一人は少し若い俊英ロバート・シラーである。さらに刺激的なことには、その表紙がまことに劇画的であり、そこには類人猿(例のヤフーなのか?)とも思しき、表情豊かな何頭もの動物が、(株価変動のごとく)激しく上下運動する折れ線グラフ上を適宜ポーズし、時にぶら下がっている。「謝辞」の最後は、次のような文章で締めくくられているのだ。

「私たち二人は〔アカロフとシラー〕は、〔挿絵作家の〕エドワード・コレンにも謝意を表したい。コレンの挿絵は——文章に頼らず直裁的に——本書のスピリッツを見事に体現するものである」

アカロフはスティグリッツやスペンスとともに、1970年代から始まるリスク経済学の成熟期の旗手である。これら三人のイニシアルがいずれも「A」か「S」であるので、この成熟期を称して、「アスの時代」と洒落ることもある。同じく「S」のイニシアルを偶々有する私としては、才人アカロフまでもが遂に「アニマル・スピリッツ」に着目するようになったのか、という感慨を抱かざるをえない。それとともに、アニマル・スピリッツという表現は決して新規な表現ではなく、むしろ言わば「原点復帰」を示すものではないだろうか、とも冷静に感じるわけである。

そう考えを進めてみると、新著の何とも奇抜な類人猿の挿絵が、別の意味で非常に奇妙奇天烈に見えてくるから不思議なものだ。あるいは「昔来た道の復活」かもしれない「古風な新著」は、何故にかくも派手な宣伝活動が必要だったのだろうか。それはともあれ、「古くて新しい内容の書物」の出現は、閉塞状況に喘いでいる我が経済学界に対して「活を入れる」意味で重要な意味を有するのだろう。本稿では、ただ近江商人との関係に絞って、その触りを吟味しながら、新しい社会科学の進むべき道や方向性について私見を開陳したいと思う。

### アニマル・スピリッツと経済活動

アカロフとシラーの新著の序文には、次のような言葉がある。

「かの大不況は、前世紀の悲劇であった。1930年代には、失業が全世界に蔓延した。そして更には、大不況の苦しみだけでは不十分であったかのように、それによるパワー・バランスの崩壊は第二次世界大戦へと導いた。実に5千万人以上の人間が不慮の死を遂げたのだ。

今や、大不況は繰り返される可能性がある。その理由は、経済学者や政府や一般大衆の全てが、近時において、驕慢に近い自己満足状態に陥ってしまっているからだ。全てのものが1930年代の教訓を忘れてしまっている」

アカロフとシラーはアメリカ人らしく「1930年代の教訓」(the lessons of the 1930s)と述べているが、日本人の私はむしろ「近江商人からの教訓」(the lessons from the *Ohmi* merchant)という言葉を使用したいと思う。2000年代における大不況の再来は、アメリカ社会や経済学界の自信を完全に消失させたようである。それどころか、世界大戦の復活劇もあながち空想ではないかもしれないぞ、という「悪魔のシナリオ」が囁かれ始めているようだ。

新著の最終第14章の「結論」部分を読むと、次のような興味ある文章にぶつかる。

「今回の大不況は予見されていなかった。大不況は現在に至るも、一般大衆によって十分理解されているとは言えないし、同様な無知さ加減は〔学者や政府などの〕意思決定者の中枢メンバーの大多数によっても共有されているのだ。その理由は、従来の伝統的経済理論においては、アニマル・スピリッツの議論や原理が全く存在しなかったからである。つまり、人々の思考様式や経営パターンに変化が生まれ、やがては恐慌へとつながる可能性が全く度外視されていた。人々の間の信頼・確信の欠如の可能性が無視されていたのだ」

そして、新著の最後は、次の言葉でもって高らかに終わる。

「何よりも、本書が読者に伝えたいことがある。そのこととは、アニマル・スピリッツの考え方と対策が十分重視される場合においてのみ、現行の経済問題解決への道筋が見つかる、ということである」

私見によると、「経済学の第二の危機」はすでに1970年代、真正ケインジアン「長女」たるジョン・ロビンソン(1971)によって声高に叫ばれていた。そして、このロビンソンこそが、ケインズ『一般理論』における「アニマル・スピリッツ」の重要性と、マーシャル経済学への伝統への復帰を一途な思いで主張していたのだ。だが、ロビンソンの絶叫は、まるで「月に吠える一匹狼」

のごとく寂しく悲しく響き、そして遂には(とくにアメリカ経済学界において)「ウルトラ期待形成学派の嵐」の中に呑み込まれ、ほとんど消失寸前の状態になってしまったのだ<sup>6)</sup>。

新著を見ると、残念ながら、ロビンソン女史の孤高な奮戦の歴史が正当に言及されていないようである。私自身の経験によると、アメリカの大学や学界においては、ロビンソンの学問的貢献を「不完全競争の理論」に不当に限定する傾向があるようだ。この新著以前に、すでに40年ほど前から、ケインズ流のアニマル・スピリッツの重要性がロビンソンによって強調されていたことを、私は特に指摘しておきたい。例えば、彼女が名作『異端の経済学』(1971)の中で述べている次の文章は、現在に至るも傾聴に値するものだと信じる。

「いずれにせよ、資本蓄積は、利潤に対する予想だけから説明することは不可能である。いま投資家が自らの支配資金から最良の収穫を見出すことに専心しているとしよう。その場合には、あまり成功していない企業は、自ら投資することを止めて、その資金をもっと成功している企業の株式購入に転用しようとするであろう。ケインズも述べているように、『企業がその設立趣意書に基づいて活動しているというのは——たとえどのように率直・誠実であっても——自らに対する装いにすぎないのだ』。資本主義的發展において最も重要な要素は《アニマル・スピリッツ》の状態である。アニマル・スピリッツは、企業の集まりの持つエネルギーならびに競争状態に専ら関わるものである。ただし、最も精力的な企業が社会全体に対して最も有益な結果をもたらす、というような必然性は存在しないのだ」

アカロフはやはり、学史や思想史を軽んじるアメリカ経済学界の「申し子」なのだろうか。私としては、新著において、経済学の危機と再生にけるロビ

---

6) 私はすでに拙稿(1998)において、ナイト、ケインズおよびロビンソンのアニマル・スピリッツ論を詳しく比較分析した。その現代改訂版が、最新著(2009)の中に収録される予定である。

ンソンの熱情に言及してもらいたかった気持ちで一杯である。いわゆる「欠席裁判」に終わるといけないので、私はアカロフとお会いする次の機会に、この点を是非確かめたいと考えている。

### 近江商人の開発力とアニマル・スピリッツ

近江商人は古くから時代を先取りして、旺盛な開発力と近代的な経営方式を採用していた。徳川時代の幕藩体制という制約下において、近江の商人たちが東山道・北陸街道・奥州街道などを用いて関八州・陸奥にまで、さらには「北前船」(きたまえぶね)に乗って日本海沿いに蝦夷地にまで交易していたことは、まさに目を見張る一大壮挙であろう。

このことはもちろん、近江商人が大いなるアニマル・スピリッツを持っていたことを物語る。だが、彼らの活躍と奮闘ぶりを、単なるアニマル・スピリッツ論の一事例とみなすだけでは、歴史的事実を不当に矮小化するリスクがあるのだ。私見によると、グローバルな視点だけでなく、歴史・伝統・文化というようなローカルな観点をも加えた、まさに「グローカルな視角」から近江商人の現代的意義と課題を論じていかなければならない。そのことから、21世紀にふさわしい「新しい社会科学」の樹立の方向性が出てくるものと思う。

図4 近江商人と天秤棒——勤勉とバランス感覚



出所：小倉栄一郎『金持商人一代記』の表紙絵を参考に、筆者が作成



「論より証拠」である。近江商人の優れた進取性と高潔な倫理観は、次のような家訓・金言によって如実に示されている。

- 「世間の有無相通じることが商人の天職」
- 「陰徳善行」, 「薄利広売」
- 「売手よし, 買手よし, 世間よし」(小倉教授の至言)
- 「治山・治水も人の道なり」(塚本商店)
- 「利真於勤」(利は勤めるに於いて真なり)
- 「星と天秤棒」(松井家の家訓)

私はとくに、最後に言及した家訓「星と天秤棒」に注目したい。図4が示すように、近江商人は笠を被り、合羽を羽織り、天秤棒を担いで、諸国行脚をした。「星」は勤勉・忍耐を象徴的に表わすロゴである。実際、商人たちは日の出前に、星が夜空にまだ輝いているうちに旅に出る。そして日没後、再び星月を仰ぎ見る時刻に目的地に到達するのだ。現代において、自ら汗水をかくことを忘れ、安易なマネーゲームに走ったウォール街の投機者たちには、近江商人の愛した「星」の意味を深く噛みしめてもらいたいものだ。

さらに、近江商人には、前後に長く伸びた「天秤棒」がよく似合っている。天秤棒はバランス感覚の重要性を体現するものだ。現代では、色々な意味でのバランスが必要になってきている。伝統的な経済学の分野では、「モノとモノとの間のバランス」, 「カネとカネとの間のバランス」, 「モノとカネとの間のバランス」を保つことが求められている。そうでないと、売れ残り、失業、豊作貧乏、インフレ、通貨危機等の諸問題が発生する。

リスクと情報の経済学が教えるところによると、「情報の流れ」が円滑に進み、いわゆる「情報強者」や「情報弱者」が生まれないようにすることが重要である。そうでない場合には、欠陥品が市場に横行するような「レモンの原理」、怠慢や手抜きというような「逆選択」など、非対称情報の世界に特有な変則事態が輩出する可能性が生まれる。

私が本稿で唱導する「近江商人の経済学」においては、短期的な金銭利益と長期的な信頼関係との間のバランス、つまり「カネとモラルとの間のバランス」をとることも求められている。さらには、知山・治水や環境保持に見られるように、「人間と自然との間のバランス」を図ることも喫緊の課題である。

このように考えると、伝統的な経済学の狭い視野だけでは、新世紀の諸々の広い課題に十分答えることは、それこそ「ミッション・インポシブル」であろう。従来の守備範囲をはるかに拡大した、時には文系・理系の枠をも超越するような、「新しい総合的な社会科学」の誕生が切に待たれるところである。来るべき新学問の創造のためには、「星と天秤棒」を肝に銘じつつ、「先見と挑戦の道」を不断に歩まなければならないのである。

## 謝 辞

去る2009年5月30日、天津市びわこホールにて、朝日・大学パートナーズシンポジウムおよび滋賀大学創立60周年記念事業の一環として、公開シンポジウム「近江商人に学ぶ——危機に克つ「三方よし」」が開催された。本稿は、そのときに私がパネリストとして報告した拙稿「経済危機をどう乗り切るか——近江商人に学ぶ」を全面的に改訂・発展させたものである。

上記シンポジウムにおいては、基調講演者の丹羽宇一郎氏（伊藤忠商事株式会社取締役会長）、パネリストの小池俊二氏（大阪商工会議所前副会頭）、岩根順子氏（サンライズ出版（株）代表取締役）、宇佐美英機氏（滋賀大学経済学部附属史料館長）、小倉一彦氏（朝日新聞大阪本社経済グループ・エディター）、ならびに滋賀大学の成瀬龍夫学長、小西中和学部長、そしてとくにコーディネーターの有馬敏則教授など関係者諸氏から、色々貴重なご意見を賜った。感謝の気持ちを表したいと思う。

本稿の成るについては、平成21年度科学研究費補助金（研究代表者：多和田眞名古屋大学教授）「食品にみる国際間情報の非対称情報下での東アジアの貿易とリスク対応のための経済分析」（基盤研究（A）、課題番号21243023）、および同補助金（研究代表者：久保英也教授滋賀大学教授「保険と資本市場の融

合と独立性」から（基盤研究（C）、課題番号20530384）から、部分的に研究資金援助を得ている。ここに深く謝意を表するものである。

## 参考文献

- Akerlof, George A., and Shiller, Robert J. (2009) *Animal Spirits: How Human Psychology Drives the Economy, and Why It Matters for Global Capitalism*, Princeton Univ. Press.
- 藤本義一（2006）『お金で買えない商人道』（NHK 知るを楽しむ）。
- Galbraith, John. K. (1990) *A Short history of Financial Euphoria*, Whittle Direct Books. ガルブレイス、鈴木哲太郎訳（1991）『バブルの物語——暴落の前に天才がいる』ダイヤモンド社。
- Greenspan, A. (2007) *The Age of Turbulence: Adventures in a New World*, Penguin Press. グリーンスパン、山岡洋一・高遠裕子（2007）『波乱の時代』日本経済新聞社。
- 原司郎・酒井泰弘編著（1997）『生活経済学入門』東洋経済新報社。
- Hicks, John (1974) *The Crisis in Keynesian Economics*, Basic Books.
- 井野瀬久美恵（2007）『大英帝国という経験』講談社。
- 井上政共編述（1890）『近江商人』。
- 神谷秀樹（2008）『強欲資本主義——ウォール街の自爆』文藝春秋社。
- 金子勝・ヒューイット（2008）『世界金融大不況』岩波書店。
- Keynes, J. M. (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan. ケインズ、塩野谷祐一訳（1983）『雇用、利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社。
- Krugman, P. (2007) *The Conscience of a Liberal*, Norton.
- Krugman, P. (2008) *The Return of Repression Economics and the Crisis of 2008*, Penguin Books.
- 水島一也編著（1995）『保険文化——リスクと日本人』千倉書房。
- 中谷巖（2008）『資本主義はなぜ自爆したのか』集英社インターナショナル。
- 西部邁（2009）『焚書坑儒のすすめ——エコノミストの恣意を思惟して』ミネルヴァ書房。
- 丹羽宇一郎（2009）『金融無極化時代を乗り切れ』文藝春秋社。
- 小倉栄一郎（1980）『近江商人の系譜』日本経済新聞社。
- 小倉栄一郎（1988）『金持商人一代記』言叢社。
- 小倉栄一郎（1989）『近江商人の開発力』中央経済社。
- 小倉栄一郎（1991）『近江商人の理念』サンライズ出版。
- Posner, Richard A. (2009) *A Failure of Capitalism*, Harvard Univ. Press.
- Reich, R. B. (2008) *Supercapitalism: The Transformation of Business, Democracy, and Everyday Life*, Vintage Books.

- Robinson, Joan (1971) *Economic Heresies: Some Old-fashioned Questions in Economic Theory*, Basics Books. ジョーン・ロビンソン, 宇沢弘文 (1973) 『異端の経済学』 日本経済新聞社。
- 酒井泰弘 (1982) 『不確実性の経済学』 有斐閣。
- 酒井泰弘 (1989) 「学会ルポ: 新しい経済学への始動——理論・計量経済学会1989年度大会, 『経済セミナー』 1989年12月号, 日本経済評論社。
- 酒井泰弘 (1991) 『リスクと情報——新しい経済学』 勁草書房。
- 酒井泰弘 (1996) 『リスクの経済学——情報と社会風土』 有斐閣。
- 酒井泰弘 (1998) 「リスク, 不確実性およびアニマル・スピリッツ——新しいパラダイムを求めて」, 駒井洋編著 『社会科学の日本的パラダイム』 筑波大学大学院社会科学研究科。
- 酒井泰弘 (2006) 『リスク社会を見る目』 岩波書店。
- 酒井泰弘 (2010) 『リスクの経済思想』 ミネルヴァ書房。
- 榊原英資 (2009) 『メルトダウン——21世紀型「金融恐慌」の深層』 朝日新聞社出版。
- Samuelson, P. A. (1967) *Economics 7<sup>th</sup> edition*, McMillan. サミュエルソン, 都留重人訳 『経済学 (第7版)』 岩波書店。
- ソ連邦科学院経済学研究所, 経済学教科書刊行委員会訳 (1960) 『経済学教科書 (改訂第3版)』 合同出版社。
- Soros, G. (2002) *George Soros on Globalization, Public Affairs*.
- Soros, G. (2008) *The Crash of 2008 and What it Means*, Public Affairs.
- Stiglitz, J. (2002) *Globalization and its Discontents*, Norton.
- 末永國紀 (2000) 『近江商人——現代を生き抜くビジネスの指針』 中央公論新社。
- 橘木俊詔ほか (2007) 『リスク学とは何か』 (リスク学入門シリーズ1) 岩波書店。
- 田村祐一郎・高尾厚・岡田大志編著 (2008) 『保険制度の新潮流』 千倉書房。

# On the Global Economic Crisis and Social Science : New Lessons from the Old *Ohmi* Merchant

Yasuhiro SAKAI

## ENGLISH ABSTRACT

We are currently in the global economic crisis that bore an outstanding resemblance to the Great Depression in the 1930s. As was noted by Richard Posner, a famous scholar of law and economics, one of the biggest puzzles about the failure to anticipate the crisis is the lack of foresight of so many academic economists. Presumably at the root of such failure of the profession lies the fact that economists today have a tendency to neglect the history of economic thought. It is high time for us to learn a lot of new lessons from the old *ohmi* merchant, who once contributed a great deal to the development of the Japanese economic and distribution system with their dedication, hard work, and high sense of balance.

According to Alan Greenspan, the former chairman of the Federal Reserve Board, the current crisis may be regarded as one of those rare, once in a century or half century events. He has added to note that after 9/11 we are living in a new world, the world of a global capitalist economy that is more open and fast-changing than ever before. It is true that his opinion on the age of turbulence is of much interest, thus being worthy of careful discussion. I do think, however, that he fails to offer us a conceptual framework for analyzing the new global economy.

It is really a surprising fact that the current global economic crisis was

not predicted, and still not fully understood by the public, the government and the academia. In their new book, George Akerlof and Robert Shiller claim that there have been no clear principles in conventional economic theories regarding animal spirits. Although I have no serious objection against their interesting argument, I believe that there remains a missing gap that should be filled in for a solid framework for the new economic theory. In my opinion, a new light should be shed on the working and performance of the *Ohmi* merchant, whose dedication and spirits of fraternity have greatly contributed to the economy, the society and the culture.

Key Words: global economic crisis, social science, the *Ohmi* merchant, animal spirits